

収穫利用コストを5分の1にする 飼料イネの立毛放牧技術

飼料イネの普及には、栽培費の低減とともに収穫利用に関わる負担を軽減する必要があります。そこで、採草率の向上、採草利用経費の削減、及び放牧期間の延長を目的として、繁殖牛による飼料イネの立毛放牧技術を開発し、その経済性を明らかにしました。

☆ 技術の概要

1. 放牧草の減少する晩秋に放牧期間を拡大するため、5月下旬～6月下旬に晩生品種の飼料イネを移植栽培し、カリ成分の低下する乳熟期以降に利用します。この場合、バックヤードとして放牧利用可能な牧草放牧圃場に隣接する水田圃場、または食用稲収穫後放牧利用が可能な圃場に隣接する水田圃場を選んで飼料イネを作付けします。
2. 電気牧柵は立毛イネの手前に、地面から約70 cmの高さに設置し、電気牧柵の下から3条先のイネ株までを採食させ、株元まで食べたなら電気牧柵を移動します(図1)。
3. 電気牧柵を活用して放牧牛の採食行動を制限することにより、地際から1～2 cmの高さまで飼料イネを採食させることができ、圃場生産量に対する採食ロス(残草)を3%程度に抑え、10aあたり100CD以上の高い牧養力が確保できます。
4. 栽培管理費を除く飼料イネの放牧利用コストは、コンバイン型専用機による稲発酵粗飼料(WCS)の収穫調製、運搬利用コストの約5分の1に減少します(表1)。この結果、事例ではWCS生産と比べて放牧利用の助成金は76千円から33千円に減少しますが、圃場生産量が多い場合は放牧利用の方が経済的に有利となります。

表1 飼料イネの機械収穫・牛舎給与と放牧利用のコスト比較

飼料イネ 1haの試算	C型専用機収穫・牛舎給与		放牧利用
	収穫調製	運搬給与堆肥還元	
使用資材費(円)	35,310	7,035	10,000
使用燃料費(円)	5,710	16,942	667
機械償却費(円)	163,600	20,000	0
費用計(円)	217,415	272,811	
費用合計(円)		490,226	115,017
飼養家畜1頭 当たり費用(円)		467	96



図1 採食のようす

☆ 活用面での留意点

1. 飼料イネの省力・低コスト利用に活用できる。
2. 放牧期間の拡大など肉牛経営の改善に活用できる。
3. 飼料イネ圃場周囲で牧草や野草放牧と併せて実施し中干しを強く行う。
4. 肝蛭などの寄生虫の感染に注意する。
5. 詳細は中央農研・関東飼料イネ研究チーム(電話 029-838-8856)へお問い合わせ下さい。

(中央農業総合研究センター 氏名 寺島一男)